の懇切な用意を併せ具象してゐる。

さて本書の構成は概説篇と各説篇とに分たれてゐて、概説篇に於いては現在までの研究の程度を紹介することを期し、各説篇に於いては箇々の主要な史蹟に對し、從來の研究並に著者の所見の要點を摘記して現地に臨む人々への指導書ともしたものである。

先づ概説篇では、方法論の説明とも見るべき序説についで、漢代、高句麗、渤海國、遼、金、元、明、清と時代を追ふて城郭、墳墓、寺廟、塔等の史蹟の各々の變遷の概要が擧げてある。元來滿洲には滿洲文化とも言ふべき固有の文化はなく、支那系、蒙古系、通古斯系などの數種の文化が、各々固有文化の荷擔者の興亡と共に、次々に盛衰を繰り返したものであるので、この史蹟の時代的概説では、時代毎の文化の交替乃至混淆の形をとつて、時間的繼起が不連續となり、まとまつた印象を得ることを困難ならしめてゐること著者の序説に述べてゐる所であつて、これは滿洲なる限られた地域を取上げる以上、誠に已むを得ない。かゝる點を補ひ乍ら、更に類別的により詳しく説明したのが次の各説篇である。此の篇では、城（渤海國首都の調査、城の話）、宮殿（泰天の故宮、太廟、文溯閣と文津閣、熱河承德の行宮）、帝陵（福陵、昭陵、永陵）、壇廟（堂子、天壇、東嶽廟、北鎭廟、孔子廟、關帝廟娘娘廟と天后宮）、佛教建築（義縣の萬佛堂石窟、義縣の泰國寺、遼系の佛塔、遼陽の白塔）、喇嘛教建築（清初の喇嘛寺、承德の寺廟）、回教寺（回教寺院）、瓦（古瓦の樣式）の順序で各種の史蹟を取上げて、興味深く説明を加へてあり、時には見學の順序に從つて案内記的に説明した部分をも見受けて種々の變化に富んだ敍述法を採ることによつて讀者の興味をそがぬ苦心が拂はれてゐる。換言すれば、概説篇は史蹟の時代別縱斷的説明であり、各説篇は各種の史蹟の種類別横斷的説明とせられる。かくて兩篇は一見無關係の樣に見ゆるも、實は渾然一體をなし、相扶つて初めて滿洲の史蹟に關する全體的な展望を得ることが出來るのである。

著者が建築史の專門家として、且つ二十餘年を滿洲の遺跡遺物の研究に費されたことは改めて此處に述べるまでもない。かゝる著者を得たことに依つて本書は平易のうちにしかも要を得て所期の目的にふさはしい成果を示し得たのである。その各章の記述のうちに著者の過去に於ける研究の迹がよく表はれてゐる點からすると實に本書は著者二十年の研究の精華とも言ひ得るのである。その爲でもあらうか、史蹟に對する著者の切なる愛着は、史蹟を破壞する心なき輩への痛烈なる悲憤の言葉として到る處に現れてゐるのが見出される。かくて史蹟の研究は一、二の個人にしてなし得ることでなく、他方史蹟の荒廢は日一日と進みつゝある實狀に於いて著者は本書を通じて、讀者の一人でも多くが、調査研究の陣列に加はり、その開明せられることを切望してゐる意味が一層強く感ぜられるのである。（昭和十九年五月・座右寶刊行會・定價十圓五十錢）、（北村敬直）

**雲岡石佛群**　　**水野清一著**

本書は副題に東方文化研究所雲岡石窟調査概報とある如く、既に六回を重ねて諸方面から多大の期待を以て待たれてゐる著者を主腦とする同研究所の該石佛群の基本的調査研究に就いての既往の業績を概觀したものである。然し本書の目的は單にかゝる學的立場からのみならず、この有名な石窟寺の全貌をより廣く一般人士に傳へて隣邦、否、東亞が嘗つての時代に持ち得た偉大な藝術の殿堂に對して親しみを感ぜしめ、その藝術の如何なるものなるかを知らしめようとする意をも併せ期したことが窺はれる。かくて著者は本書に於いて雲岡石窟寺の一般的解說書としての立場をとるのであるが、その間にまたよく、既往の調査に於いてあげ得た學的業績をば巧に取り上げてこの二つの分野の調和に著者の拂つた苦心が好果を示し、これが羽館易氏撮影の寫眞と相俟つて本書をして特色あるものとしてゐるのである。現在では美術書と云へばとかく古物愛玩的の閑事業と誤解され易く、また近時氾濫する關係書の中には然る非難に値する無反省なものも少くないが本書に於いて著者の意圖した處は、文中に「雲岡石佛に示されたその純樸なる生命力は何と言つても蒙古文化の精神的根基である。こゝにその純樸なる精神を汲み、たくましい創造力を學ぶことが出來る」「いまわれ〳〵に必要なことは、この燦然たる先人の業績を單に古文化の殘骸として棄て去ることでなく、寧ろわれ〳〵大東亞の、乃至は蒙古の古典として、今われ〳〵の生活のうちに活かしてくることであらう」と述べてゐる、この東亞民族の祖先が殘した偉業に、今なほかほる純樸な精神力と、たくましき創造力をばそれからくみとり、その美を美とし、その心を心とすることが新しき大東亞理想の實現を期し得る所以であるとしてゐる點にあり、そこに本書の大きな意義が存するのを見るのである。

さて本書の構成は卷頭にグラビヤ百三葉の見事な圖版を收め次に本文百二十八頁、目次五頁からなるが、その圖版は內容そのものにふさはしき力のこもつた出來榮えである。これは既に記した同研究所技手羽館易氏の苦心になるものであつて、現地の不自由な條件下に、これ程の深味とあたゝかみに滿ちた影像を仕上げる爲めに拂はるべき努力に對して敬意を拂ひたいと思ふ。而して圖版の選擇またよくそれを生かし、豐溢と饒多とが結果する混亂と稀薄とをさけて、各洞の持つ主潮を生かし、本文の解說と相俟つて、そこに、彼の力にみち形にこだはるところのない、明るく豐かな、創造力に富んだ初期の像樣から優美纖細な趣きをもつた龍門的な佛像にうつつて行く過程が、巧に印象づけられてゐる。勿論その中には既に我々に親しき存在となつてゐる圖像も多いが、全く目新しくて而もすばらしい作品が多く見出され、又その何れを問はずこの圖を通じて黃白の石肌のさはりまでそのまゝに、それらが全く新しい感激を以て事新らしく、見なほさせられるのは特筆せらる可きであり、殊に雲岡の生命たる初期のものに於いてこの感が深い。

次に本文には、例へば從來隋佛とされてゐた第三洞の諸佛を遼代のものと推論した創見や、或は佛傳、尊像等を通じて當時に於ける信仰の對象や信仰の態度——(佛に對する理解)——等の問題

が實物に卽して考說されてゐる等、學術的な立場から傾聽すべき所說を隨所に見出すこと併せ學ぐ可く、大戰下東亞古藝術に關する本邦學徒の精進を示す一標識をなすことが知られるのである。

（朝日新聞社刊・賣價二十三圓五十錢）（岡田芳三郎）

# 彙報

## 史學科卒業生と入學生

昨年十一月の學徒出陣に依る卒業生二十七名の外、本年論文を提出して新たに卒業した殘留本學史學科學生は次の十名で、その卒業論文の題目と氏名は次の如くである。

國史專攻　五名

日本上代精神史の一課題　中村二柄

古代經濟生活と神　木村篤治

中世に於ける法理の性格について　高田弘

鎌倉時代の復古思想　永田常次郎

我が國に於ける淨土宗の成立について——平安佛敎より鎌倉佛敎へ——　和田正之

東洋史專攻　一名

元末の亂と社會的勢力　笹本重巳

西洋史專攻　一名

フィヒテの國家觀　秋山博愛

地理學專攻　二名

アメリカ合衆國に於ける人種問題と國民の形成　小糸伸一

亞細亞的鐵鑛業の大東亞的編成　野澤信韶

考古學專攻　一名

繩文土器の起源に就いて　鈴木博司

次に本年度史學科新入學生は本科生五十二名（內專門學校卒業生十名）選科生十名の計六十二名である。

## 宮崎敎授の任官

東洋史の宮崎助敎授は本年五月十三日附で本學敎授に任官、東洋史第二講座の擔任を命ぜられ、こゝに東洋史陣容が整備を見ることになつた。

## 國史研究室近況

一、共同研究　日本語學振興委員會昭和十九年度指定研究として西田敎授を中心に中村・藤兩助敎授及び平山助手らは「日本軍學武敎の歷史的研究——國民生活との關聯」なる課題による共同研究を行ふことになつた。

二、見學　西田敎授をはじめ研究室一同は左記の如く見學を行ふところがあつた。七月七日午後市內今熊野の新日吉神社に、社司藤島家所藏の史料を採訪した。同家は非藏人の家格をもち、院の藏人を勤仕してゐて、非藏人座次惣次第（文化八寫）院藏人備亡（寬政六寫）をはじめこの職分に關する多くの記錄類がある又代々の日記、自傳にも見るものあり　宗順記には寬政二年本